

「異分野融合による方法的革新を目指した人文・社会科学研究推進事業」
(課題設定型研究領域) 研究概要

研究テーマ(領域)名

意思決定科学・法哲学・脳科学の連携による「正義」の行動的・神経的基盤の解明

責任機関

北海道大学

研究実施期間

平成 21 年度～平成 25 年度

研究プロジェクトチームの体制

研究総括・ グループリーダー・ 研究分担者の別	氏名	所属機関・部局・職
研究総括	亀田 達也	北海道大学・文学研究科・教授
研究分担者	高橋 泰城	北海道大学・文学研究科・准教授
研究分担者	坂上 雅道	玉川大学脳科学研究所・教授
研究分担者	松田 哲也	玉川大学脳科学研究所・助教
研究分担者	酒井 裕	玉川大学脳科学研究所・准教授
研究分担者	長谷川 晃	北海道大学・法学研究科・教授
研究分担者	児玉聡	東京大学・医学系研究科・専任講師

配分(予定)額

単位：千円

平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度
4,900	3,700	3,600	4,870	4,790

研究概要

① 研究の目的

「正義(justice)」という概念は、社会的厚生や公共政策の鍵を握る最重要の概念でありながらも、その重さのゆえに、実証の俎上に極めて載せにくい。このため、「正義」をめぐる論考は、これまで「正義論」として、法哲学・倫理学を中心に規範的立場（一すべし、一すべからず）から展開されてきた。しかしこうした事情は、行動科学の展開を承けてここ数年の間に急速に変わりつつある。例えば、行動経済学の知見を基に、シカゴ大学の Thaler（経済学者）とハーバード大学の Sunstein（法学者）は、選択問題の提示法を調整することを通じ、消費・年金・貯蓄などに関する人々の合理的意思決定を促す（“nudge”）処方的正義のあり方を探っている。また、California Institute of Technology を中心とする神経科学者のグループは、さまざまな正義原則と関連して異なる脳部位が賦活する可能性を、fMRI や PET などの脳イメージング技法を通じて示している。本研究は、行動実験とゲーム理論を軸とする社会的意思決定の研究者、Kantian として規範的立場から正義論を考究してきた法哲学の研究者、脳イメージングを軸に人間の意思決定過程の神経基盤を探ってきた脳科学の研究者が、分野の壁を越え本格的に連携をすることを通じて、「正義」原理の行動的機序と神経的実装を明らかにすることを目的とする。具体的には、John Rawls の正義論における分配的正義(distributive justice)の問題とそれを支える正義感覚(sense of justice)の問題を軸に、その行動的・神経的な基盤について実証的な検討を加える。

② 研究方法と年度単位での研究計画

John Rawls はその主著「正義論(A Theory of Justice)」(1971)の中で、功利主義(utilitarianism)に対置し得る、規範倫理学を展開した。Rawls の主張は、「無知のヴェール」、「原初状態」などの用語とともに、法哲学の領域を超え、経済学をはじめとする社会科学一般に巨大な影響を及ぼした。しかし、その規範的理論と対応する行動的な基盤については、ほとんど実証の俎上に載せられていない。本研究では、Rawls の規範的理論で中心的な役割を果たす「無知のヴェール」「原初状態」などの概念を「意思決定における不確実性状況」と再定義し、不確実性に直面した人間がどのような正義原則を選択するのか、選択の背景にはどのような神経機序が働くのか、選択された正義原則が「正義感覚」を通じてどのように定着するのかについて、行動実験と脳イメージング実験により明らかにする。初年次には、Rawls の正義概念を実証可能な形に置き換えるための作業と、予備的な行動実験を行う。2年次からは、本格的な行動実験を参加者 500 名ほどを用いて遂行するとともに、行動実験の知見を、神経機序と関連づけるための脳イメージング研究を開始する。3、4年次は行動・認知・脳イメージング実験を継続するとともに、本研究の実証的知見を規範的正義論に接合していくための方向を探る。5年次には、概念的に残された問題を整理し今後の検討につなげるために、霊長類学・発達認知科学などとの連携も視野に入れた次のプロジェクトを準備する。また、本研究の成果を広く社会に還元するとともに、社会脳科学と意思決定科学の連携を軸に法哲学・倫理学領域の研究者が参加する先端的な研究コミュニティを構築する。本研究の研究成果については国際学会での発表後、国際誌に逐次刊行する。なお、上記の行動実験については北海道大学社会科学実験研究センターに、脳イメージング研究については玉川大学脳科学研究所に、それぞれ世界最新鋭の実験設備が整備されている。

③ 期待または想定される成果・波及効果

本研究は、規範的正義論の行動的・神経的基盤を体系的に探ろうとする世界初の試みである。この意味で本研究の生み出し得る国際的インパクトは極めて高い。こうした学術的なインパクト

トと同時に、本研究から得られる知見は、所得格差や再配分問題に直面し「正義」のあり方を問われる今日の日本社会に対しても重要な含意をもつだろう。